

No. 506【2022年5月27日配信】

縄文時代のアスファルト (担当: 児玉大成)

こんにちは。文化遺産課の児玉です。ゴールデンウィークは、皆さんどのように過ごされましたか？ 私の場合、コロナ禍ということもあり、人混みを避け、車中泊をしながら新潟県や福島県内の埋蔵文化財センターなどの見学に加え、新潟県内の山中で天然アスファルトが地表に湧き出ている状況を観察してきました。



露出する天然アスファルト  
(新潟県内)

アスファルトと言えば、道路のアスファルトを思い浮かべますが、こちらは原油を蒸留して製造する石油アスファルトであり、自然界にそのまま存在するものが天然アスファルトです。天然アスファルトの原産地は、秋田県潟上市の豊川油田(旧昭和町)が有名で、秋田県から新潟県に至る日本海沿岸部の石油鉱床地帯が中心であると考えられています。

天然アスファルトが付着した遺物は、東日本に多く、縄文時代～弥生時代に認められます。縄文時代では、早期から利用され始め、その最盛期は後期～晩期となっており、北海道や東北地方、新潟県を中心に出土しています。

具体的には、本市の三内丸山遺跡や小牧野遺跡でも見られるように石鏃と矢柄を固定する接着剤としての利用が多いです。また、骨角器の固定(魚を突く銚・ヤスと棒、釣り針と糸)、つまみ付ナイフ(石匙)と柄の固定などにも用いられています。このほか、破損した土器や土偶の補修に用いられったり、漆と併用して文様を描く際の塗料としても使用されています。

縄文時代のアスファルトは、常温で固まったのものが、塊の状態で消費地に持ち込まれ、さらに小分けにする場合にはドロドロに溶かしてから小型の土器や二枚貝に移し、保管されることもあります。その精製にあたっては、土器の中でアスファルトを加熱・液体化し、砂や植物などのゴミを沈殿させたり、浮遊させたりして不純物を取り除くとともに、揮発成分を蒸発させて固形化させるなどの作業が行われていたものと考えられます。アスファルト原産地の一つである秋田

県二ツ井町駒形から約2km離れた鳥野上からすのうわだい遺跡では、1棟の竪穴建物跡よりアスファルトが充填された土器が複数点出土したことから、アスファルトの精製工房跡と推察されています。

アスファルトの塊は、北海道の渡島半島でも出土しており、北海道産の黒曜石、新潟県産のヒスイ、岩手県産のコハクなどの鉱物資源とともに、津軽海峡を挟んだ地域で遠隔地交易が行われていた証になっています。